



摘

み

に

べ

り

ー

を



AGORA Special
vol.323

Finland

坪田三千代=文
Text by Michiyo Tsubota
山口規子=撮影
Photo by Noriko Yamaguchi



森でベリーを摘んだら、家族みんなで家へと帰ろう。この森もロマモッキラの敷地内。フィンランド国内の森の約9割が、人の手の入った森だ。



フィンランド語ではムスティッカと呼ばれるブルーベリー。枝先に1〜2粒の実がなっている。クイッと実を捻ると、子どもでも簡単に摘み取れる。



BERRY-PICKING

森と湖と ベリーの暮らし

フィンランドの夏は、美しい。澄んだ空気と黄金色の光に満たされて、人も動物も植物も、すべてが生命を謳歌している。そして、夏の訪れとともに、森にお目見えするのが、ベリーだ。フィンランドの森でベリーを摘み、夏の暮らしを楽しむ旅に出てみよう。

*

フィンランド内陸部に広がる湖水地方は、大小の島々と湖が複雑に入り組む地形が続き、森と湖の国を実感するエリア。サイマー湖畔にあるサヴォリンナは、自然の中で休暇を過ごす人たちが集う町で、夏に古城で催されるオペラフェスティバルでも知られている。サヴォリンナの中心部から、車で約一五分。目指すベッド&ブレックファスト「ロマモッキラ」は、

湖のほとりにある森に抱かれた農場にあった。カッレとローラのビヨルン夫妻、子どもたちのアンナ、エラ、エーロ、そして三匹のフィンッシュ・ラップフンド犬が、家族ぐるみでゲストをあたたく迎えてくれる。フィンランドの伝統と地元の価値観を大切にした農家宿は、四〇年あまりも続いていて、カッレさんと四代目。フィンランドの田舎暮らしを体験できる宿として人気がある。

ダイニングがある母屋から湖までは、およそ一キロの距離。朝食の後で森を散歩していたら、茂みにかがみこんで、一心不乱に何かをしている子どもたちに出会った。

「モイ！（こんにちは）」

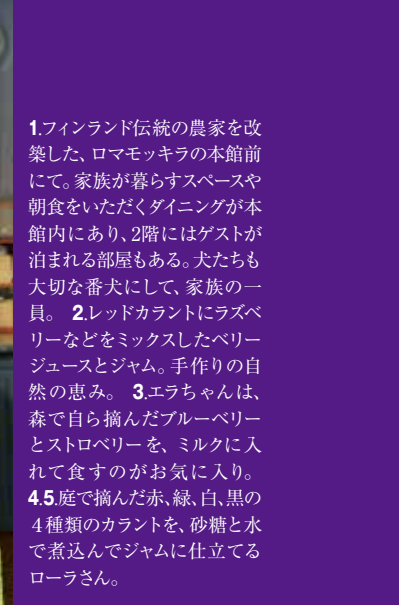
と、声をかけてみると、

「ムスティッカ！」

とシャイな笑顔が返ってくる。手指を紫色に染めながら、彼女たちが摘むそばから食べているのは、ブルーベリー（ムスティッカ）の果実。ブルーベリーの木は、大人の手が届かないの低木なので、子どもでも簡単に実を摘める。試しに、熟れた果実を手にとってみると、意外と簡単に、ほろりと実を摘むことができた。母親のローラさんは、「子どもたちは、ベリーピッキングが大好き。夏の森で遊びながら、ベリーを摘んで食べているの」と、笑顔を見せる。



1.ロマモッキラのコテージがある湖のほとりにて。湖近くの湿地にも、ブルーベリーが群生していた。2.次女のエラちゃんは、活発な子。野生のストロベリーを、薬に刺して集めていた。3.30分ほども集中してブルーベリーを摘んでいると、子ども用の小さなカゴにいっぱいになる。



1.フィンランド伝統の農家を改装した、ロマモッキラの本館前にて。家族が暮らすスペースや朝食をいただくダイニングが本館内にあり、2階にはゲストが泊まれる部屋もある。夫たちも大切な番犬にして、家族の一員。2.レッドカラントにラズベリーなどをミックスしたベリージュースとジャム。手作りの自然の恵み。3.エラちゃんは、森で自ら摘んだブルーベリーとストロベリーを、ミルクに入れて食すのがお気に入り。4.5.庭で摘んだ赤、緑、白、黒の4種類のカラントを、砂糖と水で煮込んでジャムに仕立てるローラさん。

BERRY-PICKING
眩い夏
家族の時間

フィンランドの森には、七月から九月にかけての夏、時期によりブルーベリー、ラズベリー、クラベリー、リンゴンベリー、ワイルドストロベリーなどの野生のベリー類が実をつける。北極圏のラップランドには、金色をしたクラウドベリーが実をつける。

フィンランド人にとって、家族や仲間と森に出かけてハイキングを楽しむながら、バケツに何杯も一年分のベリーをたっぷりと摘むのが、夏のダイベント。大量に摘んだベリーは、すぐに食べきれない分はジュースやジャムに加工したり、冷凍庫に保存したりする。次の夏まで、ビタミンやミネラルの補給源として、冬の間も夏の味を少しずつ消費するのだ。

ロマモッキラの庭には、赤、白、

黒、緑の各種カラント、グースベリー、シーバックソーンなどが植えられていて、野生のベリー類に加え、庭の果実も料理に用いている。自らキッチンに立って家族や宿泊者の料理を作るローラさんも、ベリーが大好き。

「ベリーは、フィンランド人にとって欠かせないもの。そのまま食べるほかに、パイによく使うし、田舎ではスープのようなキーツェリにも使います。食事のときの飲み物も、ベリーのジュースです」

キーツェリとは、ベリーのジュースに水とグラニュー糖、デンプン粉を混ぜて煮詰めた、ほんのり甘い素朴なゼリー状のデザート。ジュースは、メフステインと呼ばれる、蒸したベリーから果汁液を抽出する機器で作られる。メフステインで作るジュースは、風味や栄養分がしっかりと残っているのだとか。赤カシスにラズベリーやブルーベリーを混ぜたりして、その家庭独自の風味のジュースを作っている。

ロマモッキラには、湖のほとりに八軒のコテージがあり、本館やガーデンハウスなどに二三室がある。各コテージには自由に使える手漕ぎボートが備えてあり、ビーチにもボートが置いてあって、好きな時に、誰でも、湖に漕ぎ出して行ける。清澄な水と、天界にま

で届きそうな青い空。その中で、鏡のようにクリアでスムーズな湖面を漂っていると、日頃の生活の澱が吐き出され、浄化されるような気分になる。フィンランドの人氣漫画『ムーミン』に登場するスナフキンのように、小さな栈橋でのんびり釣りをするのもいい。もちろん北欧ならではのサウナ体験も、欠かせないお楽しみ。ロマモッキラには、サマーハウスにつきものの小屋造りの電気式サウナのほか、薪を燃やして煙を室内に充たす伝統的なスモークサウナもある。サウナで思いっきり汗をかくて、白樺の葉を束ねた「ヴィヒタ」で体じゅうを叩いたら、暑さが限界に達する前に、裸足でひんやりとした湖の中へと、ドボン！

ロマモッキラでは、フィンランド人のサマーハウスでの過ごし方そのままを、楽しめる。サウナの後は、爽やかな酸味が効いた新鮮なベリージュースをぐいっと飲むのも、フィンランドの夏の贅沢だ。

*

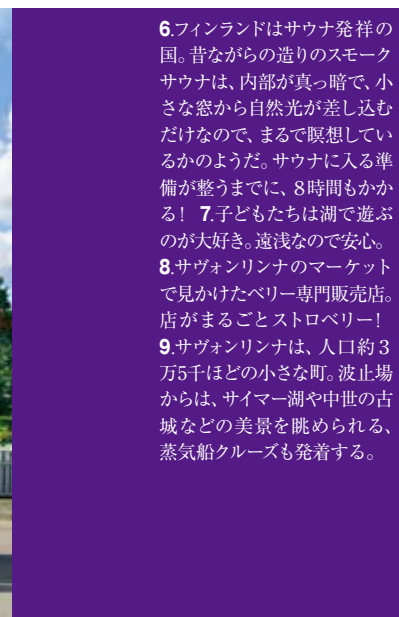
フィンランドでは、ロマモッキラのビヨルン一家のように敷地内に森がある人だけではなく、誰もが森でベリー摘みをする事ができる。慣習法として、誰もが自然を享受できる「エプリマンス・ライト(万人権)自然享受権」が定められているからだ。

国立公園内はもちろん、私有地であっても、土地の所有者に損害を与えない限りにおいて、通行し、滞在し、自然の中で一時的に遊ぶことが許されている。土地の所有者に対価を支払うことなく、ベリーなど野生の果実やキノコ、花を採取することもできる。それは、外国人観光客であっても同様だ。

この権利が認められるのは、国土における森林率が世界で最高の七三・二％であり、さらに都市部以外は人口が少ない国であるためだろう。現在、この自然享受権は、環境省のもとでガイドラインが定められており、子どもたちは自然教室や小学校の「環境と社会」の時間で、その権利と実践について学んだりする。もっとも自然を破壊すること、他人や所有者に迷惑をかけることなど禁止事項も定められていて、秩序ある自由の指針となっている。フィンランド人はその魂が森とつながっている、とも言われるが、彼らの森との付き合い方の基本が、ここにあると言える。

*

フィンランドには四〇の国立公園があるが、ヘルシンキから最も近くに位置し、車で一時間以内で行けるのがヌークシオ国立公園。旅行者でも気軽に行けて、森歩きの真髄をたっぷりと堪能できる公



9 8

7 6

6.フィンランドはサウナ発祥の国。昔ながらの造りのスモークサウナは、内部が真っ暗で、小さな窓から自然光が差し込むだけなので、まるで瞑想しているかのようだ。サウナに入る準備が整うまでに、8時間もかかる！7.子どもたちは湖で遊ぶのが大好き。遠浅なので安心。8.サヴォンリンナのマーケットで見かけたベリー専門販売店。店がまるごとストロベリー！9.サヴォンリンナは、人口約3万5千ほどの小さな町。波止場からは、サイマー湖や中世の古城などの美景を眺められる、蒸気船クルーズも発着する。